

文末のタ形重複が表す「さし迫った要求」 — アスペクトのムード化 —

井上次夫¹⁾

(2015年9月30日受付, 2015年12月17日受理)

Repetition of *Ta*-form Expressing ‘Immediate Demand’ :

Turning Aspect into Mood

Tsugio INOUE¹⁾

(Received : September 30, 2015, Accepted : December 17, 2015)

要 旨

いわゆるムードの‘タ’（叙想的テンス）が表す「さし迫った要求」について、アスペクトの完了（実現・既然）と重複形という二つの観点から分析した。例えば、単独タ形「寝た！」では命令のムードは現れないが、「さあ、寝た！」や重複タ形「寝た、寝た！」では命令のムードが現れる。これは、その形式において動作動詞のタ形が過去ではなく、完了を表す結果である。つまり、話し手による未了事態の完了の述べ立ては、聞き手に当該事態の実行を間接的に要請・命令する。その役割を「さあ」という催促の語や重複された文末タ形が担っている。特に、文末タ形が重複されると、完了の意味が強調される結果、発話時に完了事態であるべきという話し手の認識と、それに反して事態は未完了であるという聞き手の認識の矛盾から、その解消を図るための〈今すぐ事態を完了させよ〉という命令のムードが現出する。

キーワード：タ形重複、アスペクト、完了、ムード、命令

Abstract

This paper analyzes the expressions of ‘immediate demand,’ expressed by modal ‘*ta*’ (suppositional tense), from the perspective of aspect and repeated form, in order to reveal the structures that turn aspect (completion) into mood. For example, in the stand-alone *ta*-form ‘*neta!*’ ([I] slept !), there is no imperative mood, whereas there is imperative mood in the repeated *ta*-form ‘*neta, neta !*’ That is, the speaker emphasizes the present incomplete state (‘*nete-inai*’ [has not slept]) of the listener by verbalizing it as the completed state (‘*neta*’ [slept]). The listener interprets the indirect request by the speaker as ‘take action that reconciles the actual incomplete state with the verbalized complete state (i.e. ‘*neta, neta!*’ [hurry up and go to bed]).’

Key Words : repetition of *Ta*-form, aspect, completion, mood, request

1) 高知県立大学文化学部 教授 Professor, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi

1. はじめに

従来、文末に用いられるタ形に関して、過去（テンス）を表すか、完了（アスペクト）を表すか、あるいは話し手の判断の仕方・立場の表現（ムード^{注1}）であるかといった議論が行われている。そして、いわゆるムードの「タ」がなぜムードを表すと言えるかという問題については、主に状態性述語^{注2}を対象とする過去（テンス）の観点からの研究が進んだ（金水1998・2001、井上2001等）。しかし、動作性述語を対象とする完了（アスペクト）の観点からの議論はそれほど行われていないという指摘もありながら^{注3}、依然としてその状況は大きくは変わっていないと思われる。

そこで、本稿ではいわゆるムードの「タ」（叙想的テンス）のうちでも、文末が動作性述語に限定されるという点で特殊と考えられる「さし迫った要求」を取り上げ、分析を行う。

まず、2章では文末タ形が表す過去と完了について確認し、3章では文末タ形が表すムードの諸側面について述べる。次に4章では、文末タ形が〈命令〉のムードを表している言語事実を観察した上で、文末タ形がなぜムードを表すことになるのかについて先行研究に基づく説明を行う。そして5章で、文末タ形の「重複」による「強調」という観点から「さし迫った要求（その切迫性・緊迫性）」について考察を行う。最後に6章で、状態性述語におけるテンス関与のムード化（「発見、想起、確認」等）に対し、動作性述語におけるアスペクト関与のムード化として「さし迫った要求（命令）」を位置付け、「文末タ形のムード化」として整理を行う。

2. 文末タ形が表す過去（テンス）・完了（アスペクト）

現代日本語において文末タ形が表すテンス的・アスペクト的側面については、先行研究によれば述語の種類（状態性述語と動作性述語）によって次のような違いが見られるという（寺村1971他）。下線は論者、以後同じ。

I 状態性述語

- (1a) むし暑かった。 (過去)
- (1b) きのう、むし暑かった。 (過去)
- (1c) この一週間むし暑かった。 (過去) ※部分的期間の定理^{注4}

II 動作性述語

- (2a) 朝食を食べた。 (過去・完了)
- (2b) きのう、朝食(ヲ) 食べた。 (過去)
- (2c) もう朝食(ヲ) 食べた。 (完了)
- (2d) (赤チャンヲ見テ)
あ、笑った。 (完了) ※開始の実現^{注5}

文末タ形は、状態性述語においては常に過去を表すのに対し、動作性述語においてはある場合には過去を表し、またある場合には完了を表す。換言すれば、「きのう」「この一週間」「もう」「あ」というような副詞や補助的要素、そしてコンテキスト情報がない(2a)のような場合、文末タ形が過去を表すか、完了を表すかについては決定できず、二義的であるということになる。表1参照。

表1 文末タ形のアスペクト的・テンス的側面 (寺村1971: 333)

| | 動作性述語の場合 ^{注6} | 状態性述語の場合 |
|-------------|-----------------------------|----------|
| 主節(文末)に現れるタ | 完了または過去を表わす (副詞がなければ二義的) | 過去を表わす |

次に、上述の点について本稿における「タ形重複」という観点から観察する。まず、(1a)～(2d)の文末を(3a)～(4d)のように重複タ形にしてみよう。

I 状態性述語

- (3a) むし暑かった、むし暑かった。 (過去) — (確認・回想)
 (3b) きのう、むし暑かった、むし暑かった。 (過去) — (確認・回想)
 (3c) この一週間むし暑かった、むし暑かった。 (過去) — (確認・回想)

II 動作性述語

- (4a) 朝食を食べた、食べた。 (過去・完了)
 (4b) きのう、朝食(ヲ)食べた、食べた。 (過去) — (確認・回想)
 (4c) もう朝食(ヲ)食べた、食べた。 (完了) — (確認)
 (4d) (赤チャンヲ見テ)
あ、笑った、笑った。 (完了) — (確認)

すると、そこには文末タ形の「過去」または「完了(既然・実現)」の意味のほかに、「確認(確かめ)」または「回想(思い返し)」の意味が随伴することを指摘できる。すなわち、「過去」の場合には「確認」または「回想」が読み取れるのに対し、「完了」の場合には「回想」は読み取れず「確認」のみが読み取れる(その他の随伴する意味は後の5.1参照)。なお、「確認」が両者に共通するところからタ形が「過去」または「完了」ではなく、「確かめ」「確述意識」を表すとする見方も出てくる^{注7}。そして、このことは尾上(1982:24)における次の記述と大略において呼応するものでもある。

[論者注 A「完了」：アスペクトとしての「完了」、T「過去」：テンスとしての「過去」。下線：論者。]

・A「完了」の意味があるところには必ず「確認」の気分がつきまとい、T「過去」の意味があるところには大なり小なり「回想」の気分がつきまとう。

・「確認」「回想」をムード(的なもの)の名称としてM₁「確認」、M₂「回想」と書くことにすれば、「——シタ」が広義完了として表現するものの二面(α)(β)は次のように整理することができる。

(α) 対象的意味としてのA「完了」と作用的意味としてのM₁「確認」

(β) 対象的意味としてのT「過去」と作用的意味としてのM₂「回想」

こうしてみると、尾上(1982)が指摘するA「完了」、T「過去」につきまとうとされるM₁「確認」、M₂「回想」というような作用的意味(気分)が、(3a)～(4d)のようにタ形が重複する形態をとることによって、顕現化してくると言うことができるだろう。すると、このようなタ形を重複させる操作(重

複タ形)はタ形の対象的意味のA「完了」、T「過去」から作用的意味のM₁「確認」、M₂「回想」を抽出するテストとして用いることができることになる。そして、タ形重複は文末タ形のムードの内容についての考察に活用できることになる。

以上、ここでは、次の二点について述べた。

- ・文末タ形が「過去」(テンス)・「完了」(アスペクト)を表すとされている言語事実。
- ・文末のタ形重複が「確認」「回想」(ムード的なもの)を顕現化する形態であること。

3. 文末タ形が表すムード的側面

現代日本語の文末タ形が表すムード的側面について、寺村(1971)では「話し手の心的態度(ムード)」を表す「タ」として論じているのに対し、寺村(1984)においてはムードの「タ」がいわゆる「過去形」であり、話し手の「時に関わる心象」と関係するところから「叙想的テンス」という用語を用いて論じることになっている。その変化をまとめると表2のようになる。

表2 文末タ形のムード的側面

| ムードの‘タ’(寺村1971) | 叙想的テンス(寺村1984) |
|-----------------------------------|----------------------|
| (1) 実際に起こらなかったことを、起こり得たことと主張する | (iii) 過去の実現の仮想を表す過去形 |
| (2) 過去に実際しなかったことを、すべきであったと主張・回想する | |
| (3) 忘れていた過去の認識を思い出す | |
| (4) 未然のことを、既に実現したことのように仮想して言いなす | (v) 判断の内容の仮想 |
| (5) さし迫った要求を、既に実現したことのように言いなして表す | (iv) さし迫った要求 |
| (6) (過去の)期待の実現を表す | (i) 期待(=過去の心象)の実現 |

また、益岡(2000)では、その「叙想的テンス」について、それまでの研究(寺村1971、1984、高橋1985、工藤2001、金水1998等)をもとにして次の六種類に分類した。

叙想的テンスの六分類(益岡2000:23)

- 発見(例: ああ、こんなところにあった。)
- 想起(例: そうだ、明日は休みだった。)
- 確認(例: 君は確か岡山出身だったね。)
- 命令(例: さあ、行った、行った。)
- 判断の内容の仮想(例: 早く帰ったほうがいいよ。)
- 反事実性(例: 僕に財産があったなら、何でも買ってあげられるのに。)

益岡（2000）は、上記六分類のそれぞれの用法の検討から、a～cの用法（発見・想起・確認）でタ形が使用されるのは過去に焦点を当てるためであり、d・eの用法（命令・判断の内容の仮想）でタ形が使用されるのはタ形が完了性を表すためであると結論付けた。さらに、fの用法（反事実性）でタ形が使用されるのはタ形が表す過去性と反事実性との関連性によるという見解を採用する。

また、述語の種類に関して益岡（2000）は、寺村（1971）を踏まえた上で、a～cの用法（発見・想起・確認）は「いずれも、客観的な観点からすれば、現在時または未来時に成り立つ何らかの状態的事態を表すもの（p.31）」であり、「述語は状態的なものに限られる（p.31）」のに対し、d・eの用法（命令・判断の内容の仮想）では「述語は基本的に動的なものに限られる（p.34）」とまとめている。なお、fの用法（反事実性）については述語の種類に関して明言しておらず、その用例として「鳥だったなら」「旅していたでしょう」とあるところからは述語として状態的なものを想定しているともみられかねないが、実際は必ずしもそれに限られるものではないだろう。

このうち、本稿で文末タ形として取り上げるのは、寺村（1984）における（iv）「さし迫った要求」であり、益岡（2000）におけるd「命令」である^{注8}。

4. 文末タ形が表す「命令（ムード）」

4.1 「命令（ムード）」の観察

まず、文末タ形が「命令（ムード）」を表すというのは、次のような言語事実の観察に基づく。

(5a) 「さあ、退いた。退いた。」

という声が起った。廊下に立つ女中なぞの間を分けて、三つの荷が二階から梯子段の下へ運ばれた。その荷造りした箱の一つ一つは、嘉吉（かきち）と宿の男とが二人がかりでようやく持ち上がるほどの重さがあった。（島崎藤村「夜明け前」）

(5b) 「さあ。今夜の話は、ここまでじゃ」

「もっと、ききたいよう。木の実あげるから話しておくれよう」

「あした、あした！ さあ寝た寝た！」（「無人船と猿」）

(5c) （久慈ガ、膝ノ上ノ能子ニ対シテ）

「今日は、芽出度い結婚式だ。縁起の悪いことは云わぬがいい。」「そんなことを仰言ると、いつも競子さんはどんなことを仰言つて？」

「さア、立つた、今夜は僕は、侮辱されに來たんぢやない。」

「まア、ぢや、あなたはあたしと結婚なさるおつもりなの？」

久慈はいつまでも黙つてゐる。能子は久慈の膝から立ち上がった。（横光利一「七階の運動」）

(5d) ゲンキ「失礼いたします……。」

店 長「忙しいから、帰った帰った。」

ゲンキ「すいません。こちらのチラシだけでも。」

店 長「いない。いない。邪魔だから、帰った帰った！」（「メルマ！」）

最初の（5a）において「退く」という行為の主体は、話し手（荷を運ぶ嘉吉と宿の男）ではなく、聞き手（廊下に立つ女中）であったと考えられるが、実際に「退いた」か否かについてはあくまで不明であ

るとしなければならない。少なくともここで明らかなのは、廊下に立つ女中に対してすぐに道を空けるように嘉吉と宿の男が切迫した状況で声をかけたこと、すなわち、話し手が聞き手に対し「さし迫った要求」を行ったということである。

次の(5b)においても同様に、「寝る」のは話し手(老人)ではなく、聞き手(子ども)であると考えられるが、実際に子どもが「寝た」か否かについては不明としなければならない。明らかであるのは、老人がその夜の話も終わったため、子どもに対しさっさと寝るように働きかけているということである。この場合、ぞんざいな表現ではあるが、「明日になればまた話を聞けるのであり、既に寝るべき時刻を迎えているのだから、もう子どもは早く寝なさい」とでもいった意味が読み取れる。しかし、(5a)の場合ほどの「さし迫った状況」や話し手による「さし迫った要求」を読み取ることはできない。

また、(5c)では、能子の言葉に苛立ちを覚えた久慈が、それを契機に能子に対し自分の膝の上から降りて立つようにと要求し、その後、実際に能子はその要求に応じている。しかし、(5a)で聞き手(廊下に立つ女中)が実際に「退いた」と仮定する場合と比べると、状況の切迫性・緊迫性において明らかな程度差が認められる。つまり、この場合にも、(5a)の場合に比べ、その状況または話し手による要求に「さし迫った」ものは読み取れないのである。

一方、(5d)はゲンキ(営業マン)のチラシの提供に対して店長が応対している場面であるが、店長はそれぞれ理由を述べて「帰った帰った。」「帰った帰った!」と二度断っている。一度目は自分の仕事の忙しさを断りの理由としている点から状況の切迫性・緊迫性による話し手の「さし迫った要求」を読み取れるが、二度目は相手の営業活動が邪魔であることを断りの理由としている点から状況の切迫性・緊迫性によるのは別種の話し手の「苛立ち」を読み取ることができる。

以上、切迫・緊迫した状況または話し手が苛立ちを覚えた状況において、文末タ形を用いることにより話し手の「命令(ムード)」が表されていることが確認できる。この点に関しては既に言及のあるところであるが^{注9}、ここで指摘したのは、「さし迫った要求」には切迫・緊迫した状況が必要十分条件ではないこと、また状況の切迫性・緊迫性には程度差があるということの二点である。

4.2 文末タ形が「命令(ムード)」を表す理由

次に、文末タ形が命令のムードをなぜ表すことになるのか、についてみよう。三上(1953:225)は、文末タ形と文末ル形が「ぞんざいな命令」^{注10}を表す点をテンスの問題として捉えているが、それをどこに入れてよいか分からないとして、便宜上、「期待の有無」に分類している^{注11}。

(6a) さあ、そこをどいた、どいた (過去形)

(6b) ぐずぐずしないで、さっさと片づける (現在形)

まず「ぞんざいな命令」が聞き手への要求表現であることからすれば、そこに話し手の期待が存在することはひとまず了解できる。しかし、そのように考えるのではなく、命令というムードにはアスペクト面が関与しており、完了と結び付くことに起因すると考える立場からは、むしろ(6a)は三上の分類における「事実としての未了」「心理的な完了」、(6b)は「事実としての未了」「心理的な未了」に該当すると言える^{注11}。また、末タ形が「命令(ムード)」を表す理由については、従来、「完了(アスペクト)」の観点に基づく説明が行われており、それには通時的なものと原理的なものとがある。

I 通時的説明 (吉田1971)

(7a) 命令形「たれ」の「れ」音脱落 (古典語でも用例が少ない)

(7b) 連用形「たり」の「り」音脱落 (連用形命令法「たり」は江戸時代から用例も多い)

例「コリャコリャ待たり待たり、ころぶよ」(『浮世風呂』文化6年)

II 原理的説明

(8a) 「先回り宣言」^{注12}と関連

すでに実現したかのように発言し、その実際の実現を相手に強要するかたちをとっているもの。

(国広1967:68)

(8b) 時間性の確かめの断定

「た」という〈確かめ〉を自分に向ければ意志となり、相手に向ければ命令となる―終止形「た」の転用法― (吉田1971:241)^{注13}

(8c) 事態の素材的な表示

その現場で要請されている事態の内容だけを口に出すことによってその実現を相手に求め、結局は相手に命令する発話―山田孝雄の「希望喚体」に近いもの― (尾上1982:25)

なお、上記の原理的説明 (8c) によれば、文末タ形の〈命令〉に「ぞんざいな感じ／多少粗野な響き」が随伴する理由についての説明も可能になる^{注14}。

5. 文末タ形が表す「さし迫った要求 (ムード)」

5.1 タ形重複による意味の強調

本稿で文末タ形と呼んでいるものの中には、単独タ形と重複タ形 (現象としては「タ形重複」) の二種類がある^{注15}。両者ともに、この文末タ形を契機として、タ形で示された内容の行動を起こすことを聞き手に対して話し手が要求している点で共通する。しかし、次の例に示すように、単独タ形は「～ショウ・シナサイ」という勧誘・指示であるのに対し、重複タ形は「(早く) ～シロ」という強要・強制とでも言えるような〈働きかけ〉における強弱の程度差を認めることができる。

I 単独タ形

(9a) 「さア、立つた、今夜は僕は、侮辱されに來たんぢやない。」

(9b) 「君は動かないか。ハハハハ。さあ駱駝〔ノ毛布〕を払い退 (の) けて動いた。」と宋近君は頭陀袋を棚から取り卸す。室の中はざわついてくる。(夏目漱石「虞美人草」)

(9c) 宗近君は例の桜の杖で、甲野さんの寝ている頭の先をこつこつ敲く。敲くたびに杖の先が薄を薙ぎ倒してがさがさ音を立てる。

「さあ起きた。もう少しで頂上だ。どうせ休むなら及第〔＝頂上＝到達〕してから、ゆっくり休もう。さあ起きろ。」(同上)

(9d) お民は古い将棋盤なぞを出して來て三郎らにあてがったので、二人の弟子は駒の勝負に余念もない。その古い将棋盤は故吉左衛門の形見として静の屋に残っているものだ。

「さあ、早くさしたり。」

「待った。」

「いつまでそんなに考え込むんだ。」

「手には。」

「角桂に、歩が六枚。」

下座敷の縁側に近く盤を置いて、二人の弟子はそんなことを言い合っている。しばらく縁側に出て月を見ていたお民が二人のいる方へ来て見ると、三郎は相手の長い「待った」に気を腐らして（略）（島崎藤村「夜明け前」）

II 重複タ形

(10a) この光景をのぞき見ようとして、庭のすみの梨の木のかげに隠れていたものもある。その中に吉左衛門が倅の半蔵もいる。当時十八歳の半蔵は、目を据えて、役人のすることや、腰縄につながれた村の人たちのさまを見ている。それに吉左衛門は気がついて、「さあ、行った、行った——ここはお前たちなぞの立ってるところじゃない。」としかった。（同上）

(10b) 厨房からエプロンを身につけた三人が料理を運んでくる。机に並べられたのは、山のように積み重ねられたパン、生ハムの乗ったサラダ、コーンスープetc etc。どれもこれもおいしそうだ。「おまたせ。さあ、食べた食べた。」カリンがそう言うと、いや、言う前から豪と凱は猛烈な勢いで食べ始めていた。（インターネット）

(10c) 「さあ早く行った、行った。行くなれば早い方がよいぞ。じらすのは悪い。君のにおいがもう二階までにおってるからね。奴さん気が気じゃないよ。君のように、そうものごとにいちいちこだわってると、北山みたいに頭がはげあがるよ」土門に言われて、豹一は、（そうだ。このまま編輯長に会わずに帰るのは、かえって失礼になる。たとえ辞めるにしても一応断ってからにするのが礼儀だ）と、思いながら、やっと二階への階段をあがって行った。（織田作之助「青春の逆説」）

(10d) 「まあ、おでんで……。酒だけは何ぼでもあるよってに、どんどんやってや。」

「おっきに、……ちょ、待った待った。ワッと手ぇだしないな。田楽いうのはな、味噌を付けるとか言うて、あんまり駿（げん）のええもんやないからな。」（落語「田楽食い」）

一般に、語の重複はその語に強調的意味を加える。いま、以下の〈述べ立て〉における重複タ形の例をみると、(11a)～(11c)では「確かに・本当に」（確認）に基づく〈発見・想起〉、また、(11d)～(11f)では「確かに・本当に」（確認）に基づく〈十全の実現〉の意味が付加されていることが認められる。例文はいずれもインターネット。

(11) タ形重複による付加的意味①：発見・想起・十全の実現

(11a) 「えっと、でも「全国のＪＲのみどりの窓口で販売」って書いてあったんですけど…」「えっ?! そうなんですか? ちょっと待ってくださいよ……（がさがさ。）あーあったあった、あったよ……あーもしもし、すみませんね、ありました。」（確認：発見）

(11b) （大家サンカラ）「この樹なんだっけ?」と尋ねられました。とはいえ、それほど植物に感心があるかたではないので、すぐに忘れてしまうんですね。「ユーカリ」と、答えるたびに「ああ、そうだった、そうだった。」と言われ、また何日かすると、「なんだっけ?」と尋ねられるのです。（確認：想起）

(11c) 「会った事あるでしょ」「会った会った京都で会った」（確認：想起）

(11d) 土曜日は出かけた。歩いた歩いた歩いた。嫌になるくらい歩いた。（確認：十全の実現）

(11e) (ワンコソバヲ) あぁ、食べた、食べた。もう何もはいらない。もう、しばらくお蕎麦は見たくない。(確認：十全の実現)

(11f) 夕方にパンとワインで気持ちよ～くなったところでお昼寝をしたら、寝た寝た寝た寝た!!起きたら夜中でした。(確認：十全の実現)

上記の (11a) ～ (11f)、前掲出の (3a) ～ (3c)、(4a) (4d)、(5a) ～ (5d) 等での観察によれば、文末タ形の「過去・完了 (対象的意味)」には共通して「確認 (作用的意味)」が随伴する^{注16}。その「確認」は、タ形重複によって意味が強調されると結果として、テンス関与のムード、アスペクト関与のムードとして顕現することになる。本稿では、前者を「テンスのムード化」、後者を「アスペクトのムード化」と呼ぶことにする。

〔タ形重複によるムード化〕

I 状態性述語

(12) テンスのムード化：タ形重複により「過去」が強調される結果、「確認」の意味が顕現して次の意味を表す。

- ・発見 (例「あったあった、あったよ。」：確かな存在を認める述べ立て)
- ・想起 (例「そうだった、そうだった。」：確かな様態を認める述べ立て)^{注17}

II 動作性述語

(13a) テンスのムード化：タ形重複により「過去」が強調される結果、「確認」の意味が顕現して次の意味を表す。

- ・想起 (例「会った会った、京都で会った。」：確かな事態を認める述べ立て)

(13b) アスペクトのムード化：タ形重複により「完了」が強調される結果、「確認」の意味が顕現して次の意味を表す。ただし、「十全の実現」は強調的意味であり、ムードではない。

- ・十全の実現 (例「食べた、食べた。もう入らない。」：確かな事態の十分な実現の述べ立て)
- ・十全の実現要求 (例「忙しいから、帰った帰った。」：事態の十分な実現への働きかけ)

5.2 タ形重複による「命令 (ムード)」の強調

ここでは、前項で示したタ形重複が表すアスペクトのムード化 (13b) における「十全の実現要求」、いわゆるムードの〈命令〉の内実について明らかにする。

(14) 店の入口への道をふさいで座っている少年を目前にした状況

(14a) どいた！ (「！」は命令的な強調音調を表す。)

(14b) どいたどいた！

(15) 就寝時刻を過ぎても寝ないでいる我が子を目前にした状況

(15a) *寝た！ (「*」は不適格の意。)

(15b) 寝た寝た！

(15c) さあ、寝た！

(15d) さあ、寝た寝た！

(15e) 子どもは早く寝た！^{注18}

- (16) 下校時刻を過ぎてもまだ教室にいる小学生を教師が目の前にした状況
- (16a) *帰った！
- (16b) 帰った帰った！
- (16c) さあ、帰った！
- (16d) さあ、帰った帰った！
- (16e) 小学生はもう帰った！
- (17) 残業をやめて帰宅する課長が残業を続けている部下を目の前にした状況
- (17a) *やめた！
- (17b) ? やめたやめた！
- (17c) ? 残業なんかやめた！
- (17d) 残業なんかやめたやめた！

上記の観察によれば、単独タ形では〈命令〉が表せない場合(=15a、16a、17a)^{注19}であっても、それを重複タ形にしたり、文の他の成分を加えたりすることでそれが可能となっていることが分かる。このことから、重複タ形にはアスペクトのムード化、すなわちアスペクト関与のムードである〈命令〉を顕現(随伴)させる「ムード化機能」のあることが明らかとなる。このことを、さらに(15b)「寝た寝た！」の例で説明しておく。

〔アスペクトのムード化〕

A：状況：子どもの就寝時刻が過ぎている。

B：現実世界：子どもは寝ないで起きている。

C：言語世界(発話)：「寝た寝た！」＝子どもの「寝る」行為が「十全に実現された」

D：ムード化機能：

まず話し手は、A状況とB現実世界の不整合・不一致、矛盾について認識する。そして、発話「寝た寝た！」によって、発話時におけるB現実世界とC言語世界の整合(またはB現実世界のC言語世界への一致)を強制的に「確認」する。この発話は、語用論的に話し手による願望、期待の主張と解釈されるのであり、聞き手にそれと了解された結果として、「寝た寝た！」という重複タ形は「寝タ」という状況の十全な実現に向けて聞き手が「寝ル」行為を開始することへの要求表現、すなわち「寝ロ！」という〈命令〉として成立するという機構である^{注20}。

これに対し、単独タ形「寝た！」の場合には、命令的な強調音調を伴っているにもかかわらず、話し手が聞き手か人称不明の行為の主体において「寝ル」行為が実現された状況「寝タ」を話し手が言語世界において単に叙述したものと理解されるに留まるにすぎず、通常、その単独タ形による表現「寝た！」が聞き手に対する〈命令〉として理解されることはない。

しかし、単独タ形が「さあ」という誘い促す語と共起する場合や「子ども(というものは～)」という一般的性質を述べる構文に現れる場合などにおいては、それらは聞き手に対する〈働きかけ〉を意味することになり、重複タ形の場合と同様の機構によって、そこでは〈命令〉のムードが顕現するのである。

一方、次のような例からはタ形重複が通常の〈命令〉を強調する結果、時間の猶予が許されない〈今す

ぐの命令〉(高橋1985)を表すことが観察される。これは前項で挙げた「(13b) 十全の実現要求」に相当する。すなわち、「十全の実現要求」とはさし迫った実現要求である。

- (18) タ形重複による付加的意味②：十全の実現要求
 (18a) ? そこにすわった! (cf. そこにすわる!)
 (18b) さあ、そこにすわった! (=そこにすわれ。)
 (18c) そこにすわったすわった! (=そこに早くすわれ。)
 (18d) *料理を作った! (cf. 料理を作る!)
 (18e) さあ、料理を作った! (=料理を作れ。)
 (18f) 料理を作った作った! (=料理を早く作れ。)
 (18g) ? 残業なんかやめた! (cf. 残業なんかやめる!)
 (18h) 残業なんかやめたやめた! (=残業なんかさっさとやめろ。)

なお、単独タ形で〈命令〉が表せる場合、用例としては「どいた」「(ちょっと) 待った」などのほか、「(相撲の) はっけよい、残った」「(博打の) さあ、張った」くらいであり、これらは動詞の種類が少数であること、また用法も限られた慣用表現であること等から例外的なものとして位置付けられる^{注21}。さらに、通時的にみても、それらはいずれも(7b) でみた連用形「たり」の「り」音脱落の痕跡とみることができる^{注22}。

6. まとめ

以上、文末タ形のムード化について「タ形重複」という観点を加えて検討してきた。それらは、以下のようにまとめることができる。

〔文末タ形のムード化〕

文末タ形が表すムードは、テンスまたはアスペクトの関与を受ける。

I タ形単独の場合

- (19a) テンスのムード化：状態性述語においてはテンス面が関与し、過去と結び付けられる発見、想起、確認のムードを表す。
 (19b) アスペクトのムード化：動作性述語においては主にアスペクト面が関与し、完了と結び付けられる命令のムードを表す。

II タ形重複の場合

- (20a) テンスのムード化：

- ・「確かに」という強調の意味が付加し、テンス面が関与する結果、状態性述語においては発見、想起のムードが強調されて顕現化、明確化する。

例「あったあった。」「そうだったそうだった。」

- ・「確かに」という強調の意味が付加し、テンス面が関与する結果、動作性述語においては想起のムードが強調されて顕現化、明確化する^{注23}。

例「先週、図書館には、行った行った。」

(20b) アスペクトのムード化：

- ・「十全の実現」という強調的意味が付加し、十全の実現要求（＝さし迫った実現を要求する命令）を表す。これは、単独タ形の場合に比べて〈働きかけ〉の程度が強く、状況の切迫性や緊急性、話し手の苛立ち、ぞんざいさを伴う。

例「さあ、あっちへ行った行った！」

7. おわりに

本稿では、タ形が表すムードのうちタ形重複が関係する叙想的テンスの「発見、想起、命令」を取り上げた。特に、「命令」についてはこれをアスペクトの完了と結び付いたことにより随伴するムードとみる立場から単独タ形と重複タ形に分けて考察を行い、両者の間に存在する〈働きかけ〉の程度差を明らかにした。また、文末におけるタ形重複が単独タ形の表すムードを強調し顕現化させる点について検討し、その機構のありようを明らかにし、「文末タ形のムード化」として整理を行った。

なお、命令の内容や話し手と聞き手の関係、口語的表現の観点等から広く重複と命令の関係について検討すること、本稿で対象外とした他の叙想的テンスの処遇、ル形重複による命令についての考察は今後の課題とする。

注

- 1 「話し手の心的態度」（寺村1971：320）。また、宮崎（2000:50-51）によれば、「ムード（叙法）」とは文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味的カテゴリーである「モダリティ」の表現手段の中核としてある、単語レベルの文法的＝形態論的カテゴリーである。一方、川村（2002:36）は「叙法」を西洋諸言語における indicative mood・subjective mood 等の「mood」の訳語であり、述べ方の種類に対応する動詞の形態を指し、「話者の主観」や「表現態度」のことではなく、「命題を含む意味」のことでもないとする。
- 2 状態を表す静的述語を言い、一部の動詞（存在動詞、可能動詞、知覚動詞等）、形容詞・形容動詞、名詞述語「名詞＋ダ」等がこれに属する。
- 3 岩崎（2000:32）は「ムードのタ」という現象の指摘は従来からなされているものの、なぜ「タ」が過去を表さず「モーダルな意味」を表すかについては本格的な説明が少ないと指摘している。ところで、いわゆるムードの‘タ’のうち、金水（1998）が主に取り上げるのは状態性との関連から「期待（＝過去の心象）の実現」と「忘れていたことの想起」についてであり、本稿で取り上げる「さし迫った要求」については取り扱わないとする。一方で、「この用法についても、状態性と関連づけられる可能性がある」（金水1998:1170）と述べている。また、井上（2001）においても考察対象の一つとするのは状態形の場合の「発見」「思い出し」の意味を伴う用法であるが、「さし迫った要求」については案を示しつつも今後の課題としている。しかし、本稿の立場からは、状態性述語の場合と同様に、動作性述語の場合においても、過去（テンス）という観点からのアプローチによって統一的に説明されると考えることには疑問を呈する。
- 4 「発話時現在を含むことによってアルを適切とする状態があるとき、その状態の継続期間のうち、発話時現在以前の部分を取り出すことによって、必ずアッタも適切となる。」金水（2001:66）。

- 5 この「タ形は過去における実現、かつ現在実現済みの状態を表す」丹羽（1996:27）。
- 6 ここでの「動作性述語、状態性述語」は寺村（1971）のものではなく、本稿での用語。
- 7 吉田（1971:243）では、「た」は〈内的時間の確かめ・区切り〉を表すものであり、記憶・回想・仮定などと言えるのは、確述・決定の機能があるからだとする。また、森田（2001）では、「た」の本質は命題に対する話者の確認意識、つまり対象の様態を間違いなくそのようだと認識・判断する「確述意識」であるとしている。
- 8 これまで、「ぞんざいな命令」「粗野な命令」「『た』命令法」等とも呼ばれている。以下、「さし迫った要求」との区別を問題にする場合以外には、便宜上、〈命令〉を用いる。
- 9 「さし迫った要求／緊迫した状況で」（寺村1971）、「多少苛立ちを含んだことが多く／話し手のさし迫った気持を表す」（益岡・田窪1992）。「今すぐの成立を要求する」（高橋1985）、「実現を要求されている事態とは、発話直後に実現されるべきさし迫ったものである」（仁田1991）、「その場ですぐに実行されるべき動作を要求する」（益岡2000）、「すぐにその行為を実行するように促したり急かしたりする」（安達2002）等。
- 10 吉田（1971:240）によれば、この命令法はあまり上品な言い方ではない。ぞんざいな表現である。男がよく使い、女でも子供などに向かっていうことば。まだ発現していない動作・状態の実現することを相手に要求・催促するものである。もしこれを、自分自身に向かって表現したならば、実現の確実なことを見越して、先回りしていい切る意味を表すことになる、という。注12。
- 11 三上（1953:220）では、テンスの対立は客観と主観との両方に沿って現れることから、タ形とル形との主な用法を次の五通りの対立として分類している。1. 事実としての完了と未了、2. 心理的な完了と未了、3. 期待の有無、4. 想起と主張、5. 儀礼的な問いとただの問い。なお、三番目の「期待の有無」（例「あ、ここ（自分の手のうち）にあった、長いこと探していたナイフが」）については、寺村（1984）では「期待（＝過去の心象）の実現」、益岡（2000）では「発見」と呼んでいる。
- 12 先回り宣言とは、国広（1967）によれば、実際にはまだ実現していない動作・状態を確実に実現するものとみて先回りして実現した（も同然）と宣言・承認すること。
- 13 吉田（1971:241）はこれを文末タ形が「命令」を表す理由の一つとして挙げ、次の図で対比的に説明している。左は普通の完了態であり、右は緊張した現在の心境をいったものとしている。

（平叙文）

（緊張文）

僕は本を買った。 よし、買った！〔意志〕

君は本を買った。 さあ、買った！〔命令〕

一方、森田（2001:77）は、このような文末タ形には「相手が確実に命令に従うのだという、事の成立を強く心に描く話者の心理・信念（すなわち確述意識）」が示されているという。

- 14 つまり、命令にぞんざいな感じや粗野な響きが随伴するのは、要請されている事態の素材のみが裸の形で言語表示されているためであり、同時に間接性や軽さも感じられることになるのであると言える。一方、文末タ形の命令用法に丁寧体（～ました）がないこと（鈴木 1965:28）や、タ形には丁寧形がないという点から動詞をいわば名詞的・ラベル的に相手に投げかけるという性質（金水 2000:60）等からも命令にぞんざいな感じや粗野な響きが随伴する理由を説明することができる。なお、金水（2000:59）では文末タ形に丁寧形がない点で文末スル形と似ているとして「*さっさと寝ます／*そこにすわります／*開けたら閉めます！」の例を挙げているが、それらは例えば親から子、教師から生徒など明瞭な上下関係がある特殊な場面で用いられた場合には適格と判断されるだろう。

- 15 二種類の区別は「同じ形を二度繰り返すことが多い」(国広1967:67)、「たいてい同語を二回繰り返すの多いが、一回でもいうことはできる」(吉田1971:240)による。
- 16 尾上(1982)は対象的意味の「過去」に作用的意味「回想」、同じく「完了」に「確認」を対応させるが、本稿では作用的意味である「確認」を「過去」と「完了」の両方に認める。
- 17 なお、確認(例「たしか君はロシア語が読めたね」)は単独タ形の場合は認められるが、タ形重複の場合は不適格(例「*たしか君はロシア語が読めた読めたね。」)。
- 18 金水(2000:59)では「さっさと晩ご飯を{食べる／??食べた}／子供は早く{寝ろ／??寝た}」とする。
- 19 ここでの単独タ形は単一の述語形態(「*言った!／*笑った!／*走った!」等)を指す。一方、そのような単独タ形で〈命令〉が表せる場合も考えられるだろうが、特殊な場合に限られる。注21。
- 20 アスペクトに起因するムード化とは、例えば、単独タ形「寝た!」では現れない命令のムードが重複タ形「寝た、寝た!」では現れる言語事実を次のように解釈する機構をいう。つまり、話し手は聞き手に関する眼前の未完了の事態(「寝テイナイ」)について、それは話し手にとって既に完了した事態(「寝タ」)であるべきものと重複タ形により強調して確認する形式で言語化する。その発話に対し、聞き手は「話し手が言語化した完了事態(「寝タ」)と現実の未完了事態(「寝テイナイ」)の不一致を自覚し、それを解消し、合致する行動を取れ(早く寝ろ!)」という話し手からの間接的要求(意図)なのだと解釈する。
- 21 その他、舞台稽古での「はい、そこで涙を拭いた!／たまらず、倒れ込んだ!」。
- 22 例えば(9d)「さあ、早くさしたり。」「待った」はその傍証となる。
- 23 動作性述語の語彙内容によっては「去年の夏は、泳いだ泳いだ。」のように想起の外、十全の実現を随伴するが、この十全の実現はムードではなく、確かな事態の十分な実現を表す強調的意味である。

参考文献

- 安達太郎(2002)「命令・依頼のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』, pp.42-77, くろしお出版
- 井上次夫(2003)「タ形重複による差し迫った要求—完了のムード化—」『第4回大会発表論文集』, pp.33-42, 日本語文法学会
- 井上 優(2001)「現代日本語の『タ』—主文末の『…タ』の意味について—」『「た」の言語学』, pp.97-163, ひつじ書房
- 岩崎 卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-6, pp.28-38, 明治書院
- 尾上圭介(1982)「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1-2, pp.17-29, 明治書院
- 川村 大(2002)「叙法と意味—古代語ベシの場合—」『日本語学』21-2, pp.28-37, 明治書院
- 金水 敏(1998)「いわゆる『ムードの『タ』』について—状態性との関連から—」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, pp.1156-1171, 汲古書院
- 金水 敏(2000)「シタ・スルのその他の用法」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, pp.59-65, 岩波書店
- 金水 敏(2001)「テンスと情報」『文法と音声Ⅲ』, pp.55-79, くろしお出版

- 工藤真由美 (2001) 「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13, pp.40-47, 大修館書店
- 国広哲弥 (1967) 「日英両語テンスについての一考察」『構造的意味論』, pp.43-90, 三省堂
- 鈴木重幸 (1965) 「現代日本語動詞のテンス—言いきりの述語に使われたばあい—」国立国語研究所『ことばの研究』2, pp.1-38, 秀英出版
- 高橋太郎 (1985) 「モーダルな性格とテンス」『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』, pp.212-218, 国立国語研究所報告82
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ—」(再録)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, pp.313-358, くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 「叙想的テンス」『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, pp.105-113, くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, pp.225-262, ひつじ書房
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究』48-10, pp.703-740.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』, pp.117-134, くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』, pp.23-37, くろしお出版
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』(1972復刊), pp.219-232, くろしお出版
- 宮崎和人 (2000) 「ムードとモダリティ」『日本語学』19-5, pp.50-61, 明治書院
- 森田良行 (2001) 「確述意識を表す『た』」『月刊言語』30-13, pp.72-77, 大修館書店
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』, pp.224-261, 明治書院